

〔 紹 介 〕

19 世紀アメリカ労働者の生活の変化

小 澤 治 郎

世紀前半期のアメリカ産業革命期から世期末の独占形成期にかけてアメリカの労働者の生活がどのように変わったかを見るのが本稿の目的である。それは大きく分けて、働く場所での生活の変化と家庭での生活の変化に分けることができる。前者には機械および工場制の登場、労働者間の組織、労働者の管理方法の変化といった問題があり、後者には農村的社会から都市的社会への転換、大家族社会から小家族社会への転換、婦人や子供の労働の変遷の問題などがある。

本稿は Richard Balkin ed., *The Everyday Life in America Series*. の叢書のなかの、1790—1840 年の時期を扱った Jack Larkin, *The Reshaping of Everyday Life*. 1988. 1860—76 年の時期を扱った Daniel E. Sutherland, *The Expansion of Everyday Life*. 1989. および 1876—1915 年の時期を扱った Thomas J. Shlereth, *Victorian America, Transformation in Everyday Life*. 1991. の労働に関する場所、とくに工業的労働者の労働の実態を記した場所をまとめて、その変化を跡づけ、特色を探ることにした。抄訳の形をとり、筆者の興味に従って精しく紹介した箇所もあれば、簡単に要約した箇所もあることを断っておく。いずれも全体的な傾向を選んだものであり、個別の会社や都市の個別的研究ではない。

1.

Jack Larkin, *The Reshaping of Everyday Life, 1790—1840*. 1988.
Chap. 1. A Busy, Bustling, Industrial Population, pp. 6—61.

1790 年に人口 2500 人以上の都市に住んでいたアメリカ人は 20 人につき 1 人にすぎなかった。その後アメリカの都市は急成長を遂げたが、1840 年になってもその比率は 9 人につき 1 人で、まだ圧倒的に農村人口が大きかった。この間、アメリ

カ東半分の地域——東北部、中部大西洋岸、南部諸州の各地——で森が伐られ、ニューイングランドによく見られた、17世紀型の、ヨーロッパ風の家が詰め合った農村に代って、農家が散在したアメリカ型の農村が各所に生れていった。これらの農家の人々が通商し、外部の世界と通じるための中心的村落 center villages が道路の交叉点に生れ、各所で小都市に成長していった。またこれも東北部から、急流の河のほとりで水車を利用できる小さな工場村 mill villages がアメリカ産業革命の最初の段階の工業の場所として登場し始めた。ペンシルヴァニアからニューハンブシャーにかけて、あまり大きくない、中程度の河のほとりに田舎の工場が生れ、水車、滑車、ベルトが、木綿や羊毛を紡ぎ、織る機械や椅子、銃身を作る機械を動かした。工場の周辺にはこの国で初めて工場労働者たちが群がり住んだ。1823年にはまだ数戸の農家しかなかったマサチューセッツ州チェルムスフォードのローウェル村は、1840年には人口2万人の工場と労働者住宅を備えた工業都市に成長していた。ニューヨーク、フィラデルフィア、ニューオーリンズ、ボルチモア、ボストンの五大都市は1840年にはそれぞれ人口9万人を超え、ニューヨークは31万2000人に達していた。これらに次ぐ人口5万人級の都市はかなり多く生れていた。当時の都市はその大きさの割には大きな役割を果たしていた。商品、人間、家畜、着想が都市相互間、都市と農村の間を流れ、商人、職人、労働者、船員、御者たちが住みこんでいた。当時はまだ混雑した「徒歩の町」で、商品や人の流れは後の時代に比べればおそかった。石を敷いた道の上の馬車の鉄車輪の音は当時としては騒がしく、清潔さや健康の面でも農村よりは劣っていたが、活発さ、速さ、匿名性などの都市の特徴はすでに現われていた。それは商業だけではなく文化の面でも中心的存在であり、商品、本、衣類、歌、ダンス、子供の育て方、家具調度類の型までが田舎へ輸出された。

1800年ごろのアメリカでは社会的組織はまだほとんど生れておらず、家族の組織が色々な面で社会を支配する存在であった。農場、職人の工場、商店はいずれも家族単位で営まれており、それは後の時代のように消費の場所であっただけでなく、生産の場所でもあった。また当時は病人や孤児、夫や妻を亡くした人、自立できない貧しい人々もどこかの家族に属し、その家族内で世話され、養われた。最上流の都市の商人たち、南部の大農場主たち、北部の大農場経営者のような上層階層、中級の農民や小店主、職人などの中流階層、小農民や貧しい職人、土地をもたない労務者や奴隷たちの下流階層のそれぞれの家族の相異はあったが、それらが当

時の社会組織のなかで最も重要な単位であった点では共通しており、そのほかにも、のちの時代のそれに比べて当時の家族がもっていたいくつかの特色があった。

その一つは家族構成員の数が多かったことであった。その平均数は20世紀初頭の4~5人、20世紀末の2~3人にたいして8~10人であった。当時は幼児死亡率が高かったにも拘らず出生率が高く、子供の数が多かったこともその原因の一つであったが、むしろ親戚の人々や同じ仕事で働く人々が家族員とともに住んでいたことがその大きな原因であった。死亡率が高かったため、寡夫や寡婦、親を失った孤児たちが多かったが、かれらは大抵親戚の家に住んだ。かれらは働き手として働いたり、給料をもらったり、間借人として部屋代を払ったり、種々の形で、結婚した兄弟や姉妹の家に住みこんだ。また結婚前の娘たちが交際の範囲を広げるために一時的に親戚の家に家事手伝いとして住みこむ風習もあった。また青年たちも結婚前の時期、店員や見習いや共同経営者として親戚の家に住みこむ習慣もあった。貧しい家庭では養うことが難しい老人や無能力者を市や町の当局を通じて他の家に引きとってもらう習慣があったし、孤児や子供たちを農場や豊かな家に徒弟奉公にだすことが一般に行われた。これらの結果、上流、中流階層の家庭では家族員以外の人々を含めて10人を超す人々が一緒に住んでいた。家長はこれを統制するために未成年者および家族以外の人々にたいしてかなりの権威をもっており、この時期のアメリカ型家父長制が、手工業生産を担当した職人たちの組織をはじめ、この時期のアメリカ社会の活動の各面でかなりの意味をもったのであった。

1800年にアメリカの全家族の $\frac{4}{5}$ は農業を営んでおり、1840年になって商業、工業、交通がかなり発展したが、それでも $\frac{2}{3}$ の家族が農業で働いていた。従って当時の労働は農業が主力で、都市の商工業にたずさわる労働者は少数派であった。そして工場や機械もまだせん維工業や鉄道の分野に限られており、全体的にはまだ伝統的な職人の世界であった。それは手工業の世界であり、商品生産の方法はまだ小規模で機械化されておらず、標準化されていなかった。生産の方法もまだ青写真や仕様書はなく、職人たちは手で記憶し、見て考える方法に頼っていた。ほとんど計測することなく、同じ動作を無数の回数くり返すことによって経験と勘に頼って製品を仕上げる方法を会得した。たとえば桶屋はナイフの刃で木を削りながら、たる板が合わされて漏水しないように角度や先細りにする方法を習得した。大工は少し計測するだけで建物の枠を設計し、組み立てた。かじ屋は溶けた鉄や鋼鉄の色によって作業の工程の時間を決めなければならなかった。肉体的にも資格が必要であっ

た。かじ屋はかなりの腕力を持続的に要求された。印刷業は照明をろうそくに頼ったので眼を酷使した。銀の細工師、時計職人、家具職人、陶器職人など永続的に美しさを保つ商品を作った職人たちは芸術家に近かったが、かれらにはそのような意識は少なく、街でも田舎でも平凡な職人の生活を送った。

当時の農民たちと同じように、職人たちはのちの工場労働者のように毎日を時間で区切るのではなく、仕事に合わせて時間を使った。注文仕事の納期が迫っているときや季節によって仕事が多いときはかれらは猛烈な長時間労働を続けた。一方仕事が暇なときはかれらはのんびりと日を過した。仕事によってその姿は違ったが、例えば製材業の場合、河の水が多くて水量が豊かなときは、渇水期に停滞していた木材を製材するために日夜を通して製材が続行された。このようなとき、製材業労働者は12時間労働の二交替制で数週間働き続けた。アメリカの職人たちの世界はヨーロッパの職人たちの世界ほど厳しい制度ではなかった。親方 master、職人 journeyman、弟子 apprentice の言葉はヨーロッパと同じであったが、地位をめぐる規制はヨーロッパのように厳しくはなかった。銀細工や印刷業のように高度の技術を必要とする業種では、親方と弟子の父親との間に交わされた年季証文によって7年間の弟子の生活が義務づけられた。しかし多くの業種では形式ばらない口頭の契約が使われた。二つか三つの業種で修養する者もあったし、父親、叔父、兄弟などから技術を学ぶものも多かった。職人たちの妻や娘たちはしばしば商品の小売や帳簿づけで家の仕事を手伝った。男女が協同で仕事をする場合も多かった。屠殺業では男性は屠殺や運搬の仕事をし、女性は清掃や加工の段階を担当した。原則として金属や木材を道具で処理する仕事は男性の領域であり、製陶業では彩色の仕事、家具製作では椅子の藤を編む仕事など腕力を必要としない、補助的な仕事を女性が担当した。針子、刺しゅう、洋裁などの裁縫業には都市の貧しい婦人たちが多く参加した。婦人帽製造、洋裁、外套製造などの分野では女性の職人もいたが、大多数の貧しい女性労働者はその日の生計を立てるのがせい一杯の不熟練低賃金労働者であった。職人たちのなかには農業を兼業とするものも多く、かれらは農閑期だけ職人として働いた。またいくつかの業種を兼ねるものもあり、かれらは必ずしも専門職とは言えなかった。当時の家父長制の下で、親方たちは弟子たちを養育する義務があり、教育や生活指導もかれらの仕事とされた。弟子たちの労働条件、生活条件は業種により、場所により大きく異なり、時には親方と弟子との間に争いや暴力事件も見られたが、一般的に両者の関係は家庭的な親密さを伴ったものであ

た。

この職人的家庭内生産様式は1830—40年代に工業生産制によって揺さぶられていく。この背景には産業革命が徐々に進行し、人口が増えつつあるなかで、農村では新しい農器具が使われ始め、都会の中流階層を先頭に家庭内でも料理の道具から子供の教育に至るまで近代化が進行していたこと、そして何よりもせん維工業を先頭に工場での生産が拡張してきたことがあった。椅子、ほうき、靴、農器具、本、帽子などの全国的市場が出現し始めた。それらの生産にたずさわる人々の数も増え始めたが、その増加の場所はかつての職人の家ではなくなり、工場となり、新しい機械が登場してかつての伝統的な技術を必要としない業種が増え始めた。“外注”の組織が登場して工程が細分化され、原材料や完成製品の分野が職人たちの手から離れていった。工場の規模が大きくなるにつれてそこに投下される資本は大きくなり、それを調達できない職人たちが増えていった。大工など仕事が地域的で細分化が困難な業種を除いて弟子たちは職人たちの元を離れて工場で働き始めた。田舎では職人的家庭内生産の方法は残ったが、都市では急速に工場制に変わっていった。働くために農村から都市に出てくる青年たちは、かつてのように雇用主の家に住みこむことをやめて自分の宿舎に住み始めた。アメリカの都市には下宿人が増え始め、かれらは職人もしくは店員として昼間働き、食事代、部屋代、寝台料を支払う下宿人となり、貧困層、中間層の主婦たちの多くはこのような下宿人の世話をすることによって副収入を得る習慣が生れた。

工業や商業の分野で働く人々の生活のリズムは速くなり、規則的になっていった。労働時間はまだ長く、それが規則的な時計に支配され始めて労働条件は悪化した。“太陽が昇ってから沈むまで”という伝統的な長時間労働と新しい規則が結合し、かつての職人的な息抜きの時間が少なくなって労働者たちの不満は高まった。1830年代に都市の労働者の間で10時間労働が始まり、40年代には部分的成功を取めた。職業の数は増え、多様化しつつあった。商工業の拡張は物質的富を生みだし、貧富の差は大きくなり、成功した家庭は大きな富の分け前を手に入れ、その生活水準は向上していった。片や勤労者階層の生活のリズムや日課も変り始めた。一般的に経済は激動の時代、混乱と不安の時代を迎えつつあった。

2.

Daniel E. Sutherland, *The Expansion of Everyday Life, 1860-1876*. 1989.

Chap. 7. Working in Town, the Laborers, pp. 158-185.

1870年には全労働人口の53パーセントに当る約700万人のアメリカ人が農業で働き、47パーセントが非農業部門で働いていた。都市は急成長を続け、農村の青年で都市に仕事を求めて移住するものが激増しつつあった。1870年の非農業労働者のうち、数の順位で1位が家庭奉公人、2位が肉体労働者 common laborersで、それぞれ100万人を少し上廻り（双方合わせて非農業労働者人口の約2/5）、続いて3位大工と4位商店所有者がそれぞれ約35万人、続いて5位一縫製業の婦人労働者、6位一店員、7位一せん維工場労働者、8位一靴製造業労働者、9位一鉄道労働者、10位一かじ工、11位一教師、12位一馬車および御者の8業種がそれぞれ10万人であった。全体として非農業労働者のうち約半分が鉱山業、製造業、建設業で働いていた。

1870年代には熟練工や職人の世界は姿を消しつつあった。機械化はせん維工業以外はそれほど浸透しておらず、それ以外の業種のより近代的な段階の展開はこのあと数十年間にわたって不均等に、突発的に進んでいく。そして労働者の多くはまだ手で使う道具を使っていた。しかし職人たちの多くは機械に圧倒されつつあったし、その数は減りつつあった。“工場職人”の群が工場や倉庫に進出し、昔の技術は高度に分化された不熟練労働に分割されつつあった。例えばシンシナチの労働者のうち1850年に50人以上の工場で働いていたものは1/3に達しなかったが、1870年には約半数が50人以上の工場で働いていた。南北戦争後は徒弟奉公が實際上消滅しているということが各方面で聞かれた。何かの業種を何年もかけて習得する代りに、少年たちは不熟練労働者としてすぐ働き始めた。裁縫師、鉄砲かじ、製粉屋、皮鞣工、煙草職人、靴職人などが1880年代まで生き残っていくのは小さな町や村だけであった。

靴製造業は1870年に17万1000人を擁する大産業の一つであったが、職人たちが機械との競争に直面した産業であった。“工場は分散していたが新しい機械が使われるようになり、釘打機や縫製機が1台で10人分、20人分、30人分の仕事をし、工場だけで靴が作られるようになっていった。”職人たちはこの変化に順応し

なければならなかった。職人たちには注文仕事と修理の仕事だけが残され、靴通商と兼業していくものが多かったが、仕事の量が減って廃業していくものが続出した。生き残った工場は成長していった。あるニューイングランドの靴工場は煉瓦造りの三階建てで、朝7時から男、女、子供たちが群がるなかで蒸気機関が動き始め、ギア、ベルト、ピストンが騒音をたて始めた。機械を操作している労働者は一部にすぎなかったが、全体が組織化されていた。一階で人力で切られた革は大きさによって分けられ、エレベーターで三階へ運ばれた。そこではミシンを使う縫い手、糊づけする人、裏ばりをする人、ボタン穴を縫う人たちによって靴の上の部分を作られた。それはエレベーターで二階へ降され、靴底が縫いつけられるか、釘で打ちつけられた。それは再び三階へ戻され、そこで形を整え、ボタン、かかとをつけ、箱詰めされた。30から40に及ぶ工程は次々と機械化されていって生産の速度は上昇していった。

労働者たちにとってこの新しい環境は単調で疲れるものであった。従来はしゃべったり、動き廻って仕事をしていたのが、機械で働くようになってからは1日9～10時間ほとんど同じ姿勢で拘束されることになった。機械の騒音のため、しゃべったり、余裕のある行動をする雰囲気はなくなっていった。年間収入1200ドルの一部熟練労働者は別としてほとんどは年収600～800ドルであったが、季節による一時解雇が流行し始めた。機械化による過剰生産の傾向がどの業界にも見られるようになった。南北戦争の後まもない頃の工場はまだ一般に粗末で、例えば煙草工場の場合、型取器が導入されて従来よりは劣った品質の製品が大量に不熟練労働者によって作られ始めたが、その工場は窓が少なくて暗く、50人にトイレが一つといった劣悪な状況であった。

南北戦争ごろから、若い男女が工場働くために都市へ移住する傾向が始まったが、なかでも女性の労働市場への進出が目立った。南北戦争中男性が徴兵されたあとの人手不足を補うために約30万人の女性が就労した。その多くは看護婦など女性的職業であったが、店員や教師など男性の職場への進出も見られた。1870年には約200万人の女性が数百の職業で働いていた。そのうち約半分は家庭内サービス業（女中）で、部屋代、食費（週約3ドル）つきの週2ドルの給料は安くなかったが、規定時間外でもどうしても拘束されたこと、家の主人や女主人に仕えなければならない窮屈さのため、工場での労働より嫌われる面があった。かれらは家族員とは別の扱いを受け、とくに移民の人たち（約1/3を占めた）や黒人の場合は否定でき

ない恥辱感がつきまとった。

高級な仕事はまだ女性には閉ざされていた。1870年に女性の法律家、牧師、医師はいずれも男性の1パーセントに達しなかった。一般に女性は家庭内で働くものとされ、その能力は男性のそれより劣っているとされた。家庭内サービス業に次ぐ女性の働き場所は縫製業であった。1870年に女裁縫師、女仕立屋、その他シャツ、袖口、襟の製造にたずさわる人々を含めて20万人を数えた。そのうち独立して自分の工場を経営した少数の人々はかなりの収入を挙げたが、一般に“出来高払い”で自分の家あるいは工場で働く人々の収入は低かった。(まだスエット・ショップという言葉は現われていなかった。)このころミシンが普及し始めて、これを個人で購入して生産性を高める方法が流行したが、これもその代価の月賦払いが収入のほとんどに達する場合が多かった。当時のせん維工業で働く人々の60パーセントは女性で、縫製業とほぼ等しい順位の仕事であったが、この分野の機械は改良されて必要な労働者数は少なくなるとともに1人の労働者に割り当てられる仕事の量は増えていった。従来1人の労働者に4台の機械が割り当てられていたのが6~8台に増え、しかも織機の運転速度は増した。その結果、1830年代、40年代よりせん維工業労働者の労働条件は悪くなった。かつての清潔な工場や快適な寄宿舎は姿を消し、アメリカ生れの農村の女子労働者に代って移民労働者が主力となった。

このころ都会の幼児労働が増えた。農村の幼児労働、のちの1890年代の都会の幼児労働ほどではなかったが、その増加は顕著であった。かれらは工場、鉱山、商店そして街路で大人たちとともに働いた。かれらは家計を助けるために働く下流階層の子供たちであり、その賃金は驚くほど安価であった。記録されているのは家内労働の11万人、雑業労働3万2000人、工場・鉱山7万5000人であったが、10歳以下は記録されておらず、一般に報告しない雇用主が多かったのも、実数はこれよりはるかに多かったらしい。子供たちはほとんど大人と同じ仕事をしており、怪我をした子供たちも多かった。ニューイングランドなどでは半日登校、半日出勤といった制度も見られた。

当時は多くの行商人が見られた時代であった。その多くは貧しい人々で、なかには店を構えたものもあったが、ほとんどが小規模にあるいは臨時的に籠、カバン、車で商品を売って歩いた。時計、宝石、新聞、果物、煙草、玩具、菓子、木の実、花、ベット、牡蠣、風船などありとあらゆるものを大人の男女、子供たちが売り歩いた。北部では移民が、南部では黒人がその主力であった。

激しい肉体労働は男性の領域で、1870年に15万人を数えた鉱夫はその典型であった。石炭、鉛、銅、金、銀の鉱山があったが、大体同じような労働条件であった。午前7時、午後3時、午後11時の三交替制を採用しているものが多かった。労働者数人の小鉱山から数百人の大鉱山まであり、賃金は1日1.50ドルから5ドルまで多様であった。小規模鉱山ほど機械化されておらず、ハンマー、つるはし、ショベルなどの手道具に頼り続けていた。大規模鉱山は1860年代、70年代にかなり機械化が進んでいった。粗末な衣服にロウソクあるいは石油の照明をつけ、鉱山用のトロッコか巻揚台に乗って炭坑へ入り、岩盤に穴を開けたり、爆薬をしかけたり、ショベルを使う仕事をした。その他、岩盤を支柱で支えたり、不要の鉱石をとり除いたり、新しい鉱脈を探したりする二次的な仕事もあったが、一般に新米労働者がショベルを使ったり、車を押したりする肉体的労働を担当し、経験のある鉱夫が穿孔機を使ったり(1872年に圧縮空気穿孔機が登場した)、爆薬を扱う仕事を担当した。災害で最も危険なのは“陥没”で、大抵は10人を超す死者が出た。当時の鉱山は換気が不十分で安全用のヘルメットや防塵眼鏡もまだなく、鉱内の温度の調節も行われていなかったので極端な寒さや暑さが見られた。

当時急成長しつつあった鉄鋼業では8万人の労働者が働いていた。70年代はまだ練鉄の時代で鋼鉄は80年代を待たなければならなかった。不熟練労働者は日給1.50ドルで12時間労働、熟練労働者はその4倍の給料で10時間労働と労働条件は多様で、三大部門であった熔鉱炉、攪拌炉、圧延工場ともに肉体労働が支配的であった。攪拌炉と圧延工場では熟練労働者が重要人物として活躍し、かれらはしばしばイギリスから招かれた人々であった。鉄工場は大変暑い場所で、とくに攪拌炉の周辺は40度を超え、労働者たちは半裸で働いたが、高熱の下で重量物を動かす激しい肉体労働のなかで火傷と傷害は日常茶飯事の出来事であった。生産工程中に発生する有害ガスも労働者の健康をむしばんだ。

全国で14万2000人を数えたかじ屋は、輸送の主力がまだ馬であった当時のアメリカの町や村にとって欠くことができない存在であった。馬の蹄鉄をつける仕事、馬車の車輪の修理のほか、犁をはじめとする農機具の生産と修理がその主な仕事であった。1870年代のかじ屋の収入は1日2.5ドルから3ドルで、これは大工、石工、鉛管工の2.80~3.80ドルには及ばなかったが、荷馬車屋(2ドル)、ボイラー工(2.50ドル)、肉体労働者よりは上であった。

建築業で数十万人が働いていた。不況や天候の影響を受けながらも、建築業で最

も数が多い大工職の賃金は1860年の1日10時間で1.60ドルから1870年には2.90ドルに上昇した。その背景にはこれが長期の徒弟奉公を必要とする専門職であったという事情があったが、バルーン・フレーム式建築の流行や新型の旋盤の登場などのために、専門的技能の水準は低下していった。屋外での仕事であるため、鉱山や工場内の仕事よりも健康的な面もあったが、他面、高所での仕事など危険が多い面もあった。

交通業で働く人々も数十万人に達した。荷馬車、駅馬車、乗合馬車などの御者たちは当時の舗装されていない道路の上で一日中ゆさぶられ、砂やほこりのなかで1日12時間、1週6日間働き続けた。都会ではこの時期は乗合馬車に代って登場したレールの上を走る鉄道馬車の時代であった。運転手は1日12～15時間働いて1日1.75ドルの給料であったが、車掌は読み書き計算の能力を必要としたため少し地位が高く、そのほかに鉄道会社は大工、機械工、ペンキ屋、かじ工、警備員、馬具屋、保線工夫、整備工、転轍手などを雇用していた。

長距離輸送では鉄道が駅馬車に代りつつあった。技術革新が進んで速度と運賃の双方で鉄道は駅馬車にたいして圧倒的に優位に立ち、サービスの面でも、普通列車においてもストーヴや換気装置、食事サービスが普及しつつあった。ジョージ・プルマンが始めた“ホテル・カー”、“客間カー”の運賃は高額であったが快適なサービスを提供し、上流階層の豪華な旅行が現われ始めた。鉄道業はこのころ規模の拡大と高速化のため、精巧で広範な組織を必要とし始めた。1870年代に東北部と中西部の各州は事故の責任を鉄道会社に負わせる法律を制定し始め、その結果、各鉄道会社は従業員一人一人に規則書をもたせ、規則の遵守を義務づけた。機関士と火夫は機関車の管理を、車掌とブレーキ係は客車の管理を、駅勤務職員は駅の運営を規則書の規則に従って処理し、保線係や機械工たちも特定の規則によって働くようになった。給料は機関士や機械工の1日3.50ドルから不熟練工の1.50ドルまで階層的であった。

当時の労働組合は靴製造業、鉱夫、大工など特定の職業別のもものと黒人全国労働組合CNLAや労働騎士団のような全国的なもの二つに分けることができる。また従来は地域的なものが多かったが、このころ全国的なものが現われ、1860年から1880年までの間に30の全国的組合が生れた。男女別、人種別に分類できるものもあったが、職業別のもものが時間、賃金、労働条件など細かい、具体的な問題を扱うものが多かったのにたいし、全国的なものは広い、社会的、経済的改革を目標と

したものが多かった。1870年に全国で30万人の組合員がいたとされたが、実際に組合活動を行ったものはその1/10ともされる。形式的な参加も多かったらしい。小工場では10名程度の小組合が多く、全体的に多くの組合が生れ、多くが消滅していった。大抵の組合が週に1回あるいは月に1回、酒場や厩舎で会合を開き、入会金は1ドル、月会費は25～50セントと質素なもので、組合はストライキ中にストライキ参加者に少額の手当を出したり、一時解雇中に食料や衣服の援助をしたり、病人の組合員や事故後療養中の人々に援助をしたが、それほど実質的なものではなく、むしろ精神的意味合いが強かったといわれた。このころの組合はしばしば秘密組織の形をとった。これは経営者側の組合にたいする厳しい政策の反映でもあったが、組合活動の指導者たちが解雇されるのは当然だとする一般的風潮があった。1869年に設立された労働騎士団でさえ組合員の氏名は秘密とされ、組織内でさえ公表されなかった。抗議の方法も後の時代とは違い、街路でのパレードやピケットが主な方法であった。パレードでは街を行進することと街中に広告する方法がとられ、ピケットは工場の外で内部の労働者をストに勧誘したり、ストライキ破りを追い払うために使われた。ストライキは一つの工場、あるいはその一部を単位とする小規模なものが多かったが、まだきわめて危険な、偶然的なもので、決して一般的とはいえ、他の工場や部門の労働者が協調する“同情スト”はまだほとんど見られなかった。

3.

Thomas J. Schlereth, *Victorian America, Transformation in Everyday Life. 1876-1915.* 1991.
Industrial Laboring, pp. 48-66.

木材、石炭、鉱石、石油など地上および地下の資源を採取する労働者の数は1876年から1915年までの間に5倍に増えた。木樵、鉱夫、油田作業員たちは厳しい、孤立した、男たちだけの一時的な作業場で夜も昼も過した。1880年代には、ミシガン州とウィスコンシン州のストロープ松の森林で、毎冬数千人の木樵たちが働いた。1890年代には太平洋岸北西部のみ、杉、セコイア杉の森林も伐採された。木材はミシンのキャビネット、客間や寝室の家具、バルーン・フレーム型の住宅の材料などになった。1日1ドルの賃金で木樵たちは木を伐り、製材機が扱える長さに切断し、馬や牛や機関車を使って搬出した。2週間の労働のあと1日の休日

(大抵は土曜日)をかれらは近隣の製材町の酒場や売春宿のどや街で楽しんだ。鉱夫たちも同じような生活であった。有名な“フォーティ・ナイナーズ”のカリフォルニアへの移住に続いて1877年のコロラド州リードヴィル、1901年のネヴァダ州ゴールドフィールド、1897年のアラスカのユーコン河周辺への殺到など投機的な鉱山開発もあったし、アイダホ州のカールダレン、モンタナ州ビュートなど鉱山町に成長した場所もあった。西部の鉱山のほとんどは企業連合によって経営され、ペンシルヴァニアの無煙炭鉱山も同じように合併された。ウェールズ、ポーランド、ドイツ、ロシア、オーストリア＝ハンガリーから来た男や少年たちが1917年にはこの地域だけで18万人に達した。朝早く、サイレンの音とともに鉱夫たちとその助手たちは、仕事着とゴム靴、ランプのついた帽子をかぶり、錫の弁当箱をぶら下げてかご型のエレベーターで縦坑を下り、自分たちの持ち場の坑道に着いた。木材が組まれた坑道には狭い線路が敷かれており、らばが引く車がエレベーターまで石炭を運んだ。当時の坑夫たちが使った道具はつるはし、シャベル、穿孔機、爆薬、導火線および木材であり、坑夫たちは岩盤を確めたあと爆薬を埋める穴を掘り、点火した。爆発のあと坑夫たちは粘板岩を石炭から分け、これらの作業はその日の割当量の石炭が掘られるまで続いた。熟練坑夫が仕事の手順を支配した。かれは鉱山経営者たちと1車輛当り、あるいは1トン当りの価格を決めて契約し、預った資金の一部で道具や火薬を購入し、助手たちに給料を支払った。助手たちはらばの御者をつとめる少年たちであり、坑道の入口の近くにある砕炭場で働く少年たちやすでに一人前の仕事ができなくなった老人たちや怪我をして障害者になった坑夫たちであった。鉱山では事故や環境の悪さが生む傷害の数は多かった。岩盤の崩壊、石炭車の暴走、洪水、爆破の際の事故に加えて各種の有害石炭ガスも死や傷害をもたらした。炭じんによるじん肺患者も多かった。不吉な事故を知らせる時刻はずれのサイレンの音、不吉な教会の鐘の音、妻や子供たちが亡くなった父を待つ長い時間などは鉱山でしばしば見られる光景であった。この地の住民で親戚の誰かが事故で死んだ経験の無い人は少なく、家族による通夜や共同埋葬もありふれた行事であった。

鉱山業で見た熟練労働者は、ほかにも小さな、注文に頼る仕事場で生き残っていた。木材業、鉱山業、石油産業とはちがって、工場のほとんどは都市にあった。それらは都市の商業中心地の近くや製造業が集った地域にあり、大工場の周辺を小工場が取り巻いて特製品を供給したり、契約で仕事を請負ったりした。例えばフィラ

デルフィアでは3~8人の労働者を雇う工場は熟練工工場(クラフト・ショップ)か搾取工場(スエット・ショップ)のいずれかであった。前者の熟練工による生産は19世紀を通じて減少していったが、装飾的な鉄工細工、上等の馬具や鞍の製造、捺染業などでは生き残った。これらの分野では場所(工場は小さく、多くの機能を持ち、個人的であった)と仕事の方法(職人の技術や伝統の仲間意識が強かった)で特徴があった。ここでは雇用主は労働者たちと賃金、労働時間、労働条件を直接に交渉した。またこの分野では仕事の分化と機械化は進まなかった。例えば手袋製造では部分的な労働の細分化にさえ熟練労働者たちは抵抗した。スエット・ショップは衣服産業、縫製業に集中していた。この分野では伝統的な熟練労働は姿を消し、仕事の分解が進行した。熟練労働者に婦人、子供、移民たちがとって代り、かれらは個々の小さな仕事に専門化した。仕事の方法は工場内と工場外に分れ、前者は屋根裏、倉庫、長屋などが作業場となり、後者は労働者の住宅が作業場になった。ほかに労働者の住宅が作業場となった業種には造花、煙草、玩具、紙箱などがあった。この分野の1890年代の男の労働者の賃金は週6ドル、女性労働者は週4ドルであった。そして、かれらは時間的に不安定な仕事の配分と、時には仕事がない時期があるという不規則さを耐え忍ばなければならなかった。

1900年に大規模工場労働者はアメリカの全産業の $\frac{2}{3}$ を占めた。500人以上の労働者をもつ企業が1063あり、1000人以上の労働者をもつ企業が443あった。19世紀初期に河川沿いの小村に生れた工場は世紀中頃には石炭の蒸気機関による工場となって都市に移動し、世紀末には電気の時代となった。このころニューハンプシャー州のマンチェスター(アモスキング会社)、ノース・カロライナ州のカナポリス(カノン工場)、メリーランド州のスパローズ・ポイント(ペンシルヴァニア製鋼会社)などいわゆる会社工場町が生れていた。ニューヨーク州のトロイやシンシナチのミル・クリーク・ヴァリーなど大きな都会では工場地域が生れ、ここにはこれらの地域のための銀行、蒸溜所、教会、人種別のクラブ、酒場、新聞が生れた。工場内ではいくつもの世代の職人たち、肉体労働者たち、農民たちが新しい労働習慣を含む生活の変化を経験した。ハーバート・ガットマンによると、工場は“工場以前の人々”を1843年から1919年という短い期間に、“近代的産業労働者”に変えたのであり、工場内労働が真に新しい労働者の世界となり、それはより分化し、規律化され、機械化されたのであった。ここではしばしば歌うこと、飲むこと、冗談を言うこと、煙草を吸うこと、そして一般的会話までもが禁じられたのであり、それぞ

れの民族的背景をもつ労働者がその出身地の祝祭日を祝うことが禁じられ、ユダヤ人の場合には土曜日の安息日が禁じられた。また工場内の労働には死や肉体の傷害が潜んでいた。1913年のある統計は、産業上の事故による死者を年間2万5000人、障害者になったり、働けなくなったものが70万人と推定した。この仕事の世界は、リチャード・エドワーズによれば、“労働者と管理者が時間と才能、エネルギーと技能の統制のために競った争いの場”になったのであった。1883年に機械工のジョン・モリソンが上院の委員会で報告したところによると、“仕事の難しい部分は細分化され、一人の労働者は一つの機械の特定の部分だけを作り、他の部分については何も知らない状況になった。”そして“徒弟の組織は姿を消し、労働者は自分が配置されたところだけの方法を学び、他の分野へ変更されるまではそこにとどまる。”状況になった。同じような、専門化しない労働者たちの群が、一連の反復的な仕事をくり返すようになり、労働者が生産過程を支配することは少なくなった。工場の規制が時間と人を統制するようになり、かつて独立した職人たちが自分の仕事場で激しい労働とおしゃべりやビールを飲んで休息することを織りまぜながら労働したのにたいし、機械に時間を合わせた仕事が連続的に行われるようになった。職人たちと違って、工場労働者たちは自分の道具をもたなかった。機織機、圧縮機、鍛鉄用のハンマーなどの生産手段は工場の所有者たちが支配しており、かれらはその生産性を高めるために、その製品をより速く、より安価に、より少ない人間労働で生産できるような技術的改良をつねに探し求めた。機械が人間の労働の速さを決めるようになった。1862年にマサチューセッツ州リンのマッケイ工場の女性労働者が言った。“私は1時間に80足の靴を作った。機械がそれだけの速さで動いたからだ。”労働騎士団のある労働者にとって、機械が広範囲に仕事場に進出することは労働の墮落を意味した。“人々はかれが扱う機械の一部と見なされている。かれらは機械と同じようにレッテルを貼られ、荷札をつけられる。そして製造業者の利益のために使われる機械の一部と見なされている。”

新しい機械が導入されると一時解雇が増えた。紡績工場で新しい紡績機が導入されると熟練労働者の数が減らされ、農機具会社で圧縮空気による鋳型工法が導入されると熟練鋳型工が減らされ、不熟練労働者が代って採用された。より効果的な機械が導入されることによって鉄鋼業では加熱工や圧延工の仕事がなくなり、ガラス製造業ではガラス吹き工が不要となり、靴下工場では織手が要らなくなった。機械化が進んだ分野では男性に代って女性労働者が採用された。1900年には女性労働

者の数は全体の1/5に達し、せん維工業、かん詰工場、衣服産業、食品加工業では女性労働者が支配的になった。

かつての小工場と違った労働環境をもった大工場が20世紀初頭に現われた。1915年にアーマー・シカゴ屠殺かん詰工場は6000人の労働者を擁し、U.S. スチール会社のホームステッド工場では9000人の労働者が働いていた。ミシガン州ハイランド・パークのフォード工場では1万6000人が働いていた。これらの大工場は自らの鉄道駅、水道施設、エネルギー供給施設、電話施設、消防署、安全保障組織を備えた小さな都市であった。新しい工場は広大な空間を必要としたので、新しい工場の型と住宅市場を作りだした。

19世紀を通じてアメリカ工業は大量生産への道を歩んできた。火器の部品交換性、工作機械の精密なジグとゲージ、製粉業や鋳物工場のコンペアー・ベルトの採用、かん詰工場の各種機械、鉄鋼業の工作作業の標準時間を決める操作、肉加工業の解体ライン、自転車製造の板金打ち抜きと電気抵抗溶接などの諸方式が集大成されたのが1913—14年のフォード自動車会社のハイランド・パーク工場の連鎖的アセンブリー・ラインであった。フォード会社は流れ作業に必要な大量の労働者の確保と労働組合封じのために、1日8時間労働制と1日5ドルという当時の相場の2倍の給料を支払い始めたが、これもある労働者の妻によれば、“あなたの始めた拘束制は奴隷監督です。フォードさま。私の主人は帰宅するとすぐ寝ころがって食事もしません。それほど疲れているのです。何とかならないのですか。1日5ドルは有り難いです。しかしそれだけのことはあるのです。”というのが実態であった。労働者たちは機械化と標準化と自動化に多くの方法で抵抗した。ストライキは最も目立つ、劇的な方法であった。経済的条件、労働条件にたいする直接の解答であっただけでなく、ストライキは労働者階級の自己確認の表現であり、アラン・トラハテンバーグによれば、“毎日の生活の基準ノルマにたいする反抗であり、雇用者の権威にたいする屈従”を表わすものであった。“労働者が経済的困窮や暴力や逮捕の危険を冒してストライキをやった”のは、“賃金の切り下げ、新しい技術および経済的支配の統合や集中が増える時期の企業間の競争の激化”が原因であった。騒々しい労働対資本の闘いは、第二の内戦と都市の無政府状態にたいする恐怖を生みだした。この結果、社会秩序を維持するための国家権力の成長を促した。1877年の血なまぐさい、破壊的な鉄道ストライキのあと、“州兵”を収容するための新しい部隊本部が各都市に生れた。この時期に公的および私的な警察組織、州兵およ

び探偵の組織が拡大した。

む す び

以上 19 世紀の三つの時期のアメリカ労働者の生活を概観した。初期の 1840 年までの時期はまだ工業化が部分的にしか進んでいない時期で、家庭内手工業生産が職人たちによって営まれている段階であり、ヨーロッパから伝わり、アメリカ化した親分 = 徒弟の制度がその根幹をなしていた。せん維工業を先頭に若干の工業化が進むがまだ規模は小さく、機械の導入も部分的で、動力の点からもまだ農村工業が支配的で都市の工業化はまだ端緒の段階だった。

1870 年段階になるとかなり工業化が進む。労働者数から見れば約半分が非農業部門で働き、そのまた半分が鉱山業、製造業、建設業で働いていたが、1 工場の労働者数もかなり増え、職人の時代から工場の時代への転換が各所で見られた。製靴工場の例で、靴職人が作っていた靴が工場で分業的に作られるようになる過程がわかる。その背景には靴が一般的に使用され始め、大量に生産、販売され始めた変化があったはずである。工場と機械の登場とともに技能をもった職人が要らなくなり、不熟練労働者で足りる傾向が進む。この傾向が女性、移民、子供たちが労働市場へ進出するきっかけとなった。この傾向は工場だけでなく、各方面で世紀末まで続いた。

世紀末には大工場が労働者総数の $\frac{2}{3}$ を擁して支配的となった。機械の発達は大工場内の管理部門と一般労働者の世界を分裂させ、かつての現場監督や熟練労働者が工場内を指揮する制度は姿を消し、一般労働者は機械に割り当てられた仕事を反復する単調な労働を強制されることになり、かつての小工場の牧歌的な雰囲気はなくなった。大工場は大都市の工場地域に位置するが、すでに大都市の過密状況は極限に達しつつあり、工場の郊外への移転、会社工場町の形成も一般的になってきた。かつては熟練工たちが使いこなした道具類も不要となって、労働者は新しい機械に使われる存在となっていった。生活も時間と規則にしばられた緊迫したものとなり、景気の変動などの情勢の変化がストライキを頻発させ、第一次大戦に至るこの時期は大ストライキ時代となった。その他、業種によって部分的に小工場制が生き残り、職人工場やスエット・ショップの町工場は低賃金を武器に生き残るが、その不健全さ、不衛生さはスラム街問題を生むことになった。

以上の、工場制の登場からそれが支配的になる状況への転換は社会に多様な影響を及ぼした。家庭生活への影響も多様であった。大きく見て大家族から小家族へ変わっていくが、その背景には職人時代の家父長制から、父親が工場へ働きに出て家庭の管理は母親の仕事となる体制への変化があった。かつては生産と消費の場所であった家庭は、消費だけの場所へ変わっていく。学校、病院などの近代施設の登場も家庭の役割を変えていく。家庭生活は富裕者層と貧困者層では全く違った姿を呈するし、中産階層はその両者の間にあって社会をリードすることになるが、このような問題は別の稿でとり上げたい。